

四国遍路の魅力の世界に伝えた西洋人

オリヴァー・スタットラーの功績を中心に

モートン常慈 徳島大学准教授

はじめに

今から百年前の一九一七(大正六)年、シカゴ大学人類学教授のフレデリック・スタール(一八六八―一九三三)は、欧米人として初めて、長く困難な四国遍路の途についた。彼は、その最初の旅では巡礼の半分の行程しか完遂できなかったが、一九二一年に再来日し、四国八十八箇所霊場の全てを巡った。

スタールは、セントルイス学術研究団の一員として、アイヌ研究を目的に一九〇四(明治三七)年に初来日。以来、一五回日本を訪問し、日本の民衆文化への関心を深めた。特に納札の研究で知られ、日本各地の神社・仏閣を行脚して、『お札博士の見た東海道』『山陽行脚』『御札行脚』『納札史』などの著作を残している。高僧空海・弘法大師(七七四―八三五)に大きな敬意を払い、空海の足跡を辿りたいと強く願ったことから四国遍路に関心を寄せるようになった。スタールは、訪れた先々で歓迎を受け、後に四国巡礼の旅は彼の人生の中でも最も興味深い体験の一つであったと記している。彼は、香川県の金刀比羅宮を訪れた時に「Courtesy (礼儀正しや)」と Hospitality (手厚いもて

なし」というメッセージを書いて、旅の間に出会った日本人に対する彼の印象を表現している。

同じ一九一七年、第一次大戦下の中国青島で日本軍の捕虜となった約千人のドイツ兵が、徳島県鳴門市大麻町松（旧板野郡板東町）に開かれた板東俘虜收容所に收容された。收容所は一番札所に近く、ドイツ兵も日本の巡礼者の姿を見ることがよくあつたろうし、実際、收容所の印刷所で発行していたニュースペーパー『デイ・バラツケ（兵舎）』の一九一八年六月八日付け記事には、「眞の遍路（巡礼者）とは、汽車、バス、人力車あるいは船などは利用せず、聖地を歩いて廻るものである」とあり、筆者は、歩いて廻る巡礼は遍路の肉体にも精神にも良いものであり、遍路は弘法大師の教えに忠実で、贈り物を受けた場合、断つてはならないなどと解説している。

捕虜のひとりヘルマン・ポナーは、後に大阪外語大学のドイツ語教師となつて日本に骨を埋めるが、彼の弟のアルフレート（一八九四〜一九五四）も一九二二年に来日し、六年間、旧制松山高등학교でドイツ語の教鞭を執っている。興味深いことに、アルフレートは、滞在中の一九二七年に四国遍路に出かけ、その体験を著書『同行二人の遍路』（邦訳『大法輪閣、二〇一二年）や博士論文にまとめている。また彼は、スタールと同様に、「お接待」という習慣に言及し、近代的な大都市では、日本においてさえも、あり得ないことと驚きを示している。

スタールとポナーが残した記録は、外国人と四国の歴史にとつて重要な足跡を残した。それらを読むことによって、百年前から四国遍路に出た外国人はそのすばらしさや顕著で普遍的な価値に気が付き、論文などによって世界に知らせようとしたことがわかる。

次に、四国遍路を世界に発信した重要な人物は、ハワイ大学教授オリヴァー・スタットラーであった。一九六〇年代後半に彼が自身としては最初の四国遍路を終え、後日『日本巡礼』（一九八三）を発刊すると共に同じ題名で記録映画を制作したことにより、初めて一般大衆が四国遍路の意義深い

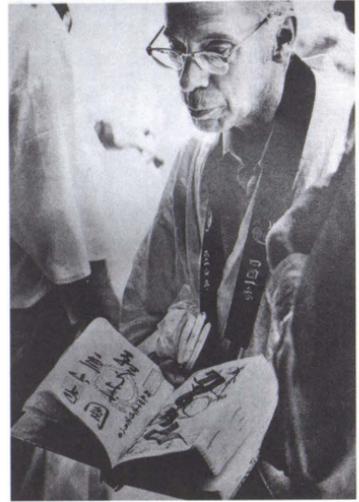
文化を外国人の体験から知ることができた。スタットラーの研究と一九七〇年代後半および一九八〇年代に彼が引率して行った巡礼ツアーは、四国遍路の魅力を世界中に広めると同時に多くの人々が四国を訪れ巡礼の旅を体験することを促進する役目を果たすものとなった。

本稿では、オリヴァー・スタットラーの人生にハイライトを当て、彼が引率したツアーについて記載し、彼と彼のツアーに参加した人々が巡礼体験について考えたことを浮き彫りにするつもりである。そして、外国人が四国遍路の普遍的な価値や魅力を経験したここ百年間で、多くの人々はこの巡礼路を辿る旅が世界に類のない固有の文化的、歴史的かつ社会的な価値を有することを理解したことを示したい。

日本との関わり

オリヴァー・スタットラーは、一九一五年、シカゴから三〇キロ離れたイリノイ州の小さな町ハントリーで生まれた。一九三六年にシカゴ大学を卒業。一九四七年に軍属として来日し、一九五八年まで滞在した。日本の創作版画に魅せられ、屈指の版画コレクターおよび日本文化の研究者となる。その後、蒐集・研究のために度々来日しているが、一九六〇年から一年間伊豆下田に滞在した折、初めて四国を訪れ、遍路の寺院を巡っている。この旅がきっかけとなって巡礼に興味を抱き、一九六八年春、最初の四国巡礼のために来日。その時のことを「全く幸せな経験ではなかった。疑念を抱いていた。巡礼というものの性格を理解していなかった」と振り返っている〔註〕。翌年、巡礼に関する本を執筆するため松山に二年間滞在した。

一九七一年、二度目の巡礼を終える。一九七七年からはハワイ大学東洋学客員教授として研究に



オリヴァー・スタットラー（『毎日グラフ』1979年9月号より） 写真提供：毎日新聞社

取り組み、一九八〇年には神戸女学院大学客員教授として一年間教鞭を執った。一九八三年、著書『日本巡礼』を発刊すると共に同名の映画も発表した。教授として、巡礼について講義する機会も多く、一九七〇年代後半から八〇年代前半にかけては、米国からの学生や日本に滞在中の交換留学生向けの「巡礼ツアー」を数多く引率した。二〇〇二年の没後、彼の調査研究資料はまとめられ、ハワイ大学マノア校にオリヴァー・スタットラー・コレクションとして収められている。

安易な巡礼への疑念

オリヴァー・スタットラーは、「日本文化を研究するためには、その根源性を浮き彫りにする四国遍路に光を当てる必要がある」と記している。かつてある僧から「全霊を巡礼に打ち込むこと、

地位や身分を忘れること、そして日々の雑事を捨て去ること」と説かれたスタットラーは、しかし「遍路としての伝統的な白装束を身につけた人は少なく、誰も菅笠を被っていない状況に落胆した」。そして、ほとんどの遍路がバスツアーを利用していることを指摘し、こうした安易な巡礼スタイルに疑念を呈している。

私は、時々、ヒッチハイクで車に乗せてもらうし、それに感謝もしている。しかし疑念が頭から離れない。バスやパッケージツアーが遍路の精神性を低下させるのではないかと。

スタットラーは、数年後も改めて同じ考えを表明している。「バスや車に乗って巡ることは、メリットがあるかもしれないが、修行でもなければ、遍路を實行するものでもない」〔註2〕。

一九六八年、スタットラーは、真言宗の若い僧と旅をし、徒歩やバスあるいは列車を利用して約四〇日間で八八か所の寺を巡る。二人は、三月二九日、一番札所靈山寺を皮切りに旅を始めた。一九番札所立江寺で住職から、巡礼をする人々の動機が「戦前は信仰に主眼があつたが、戦後は観光目的に変わってきた」と知らされる。二人は高知県内では遍路のほとんどを列車とバスで移動し、その後タクシーにも乗ったが、スタットラーはそうしたやり方が誠実に欠けるように思えた。彼は、巡礼を行っている間、フレデリック・スタールの研究やアルフレート・ポナーの本について学んだ。七五番札所善通寺の住職は、この地域に多くの米兵が駐屯しており、彼らが一部の自由時間の過ごし方として寺を訪れると話した。住職は、「誠意を持って彼らを受け入れ、日本と米国の間の理解を深めるよう努めた」と語った。この年と翌年の巡礼で、スタットラーは、ほとんどの寺で住職と面談している。



上：遍路道を歩くスタットラーと森川誠夫（1971年）

下：四国遍路ツアーの記念写真（1979年）

ハワイ大学オリヴァー・スタットラー・コレクションより

一九七一年、二回目の巡礼

スタットラーは、一九七一年の三月から五月に二回目の完全な巡礼を遂行した。森川誠夫（一九四六〜二〇一六）が通訳者を兼ねて同行している。森川は、その後一九七九年に巡礼グループに同行することになる。森川は、二〇〇七年から数年間、松山市を拠点に、「巡礼パートナーズ」という名称で、同地域を訪れる外国人の旅をサポートする事業を行っている。

スタットラーの日記には、一番札所では三つのグループの人々が、ミカンや金銭、ティッシュペーパー、キャラメルなどを遍路する人々に配り、別の場所では、「徳島市とその郊外で昨日七回も贈り物としてお金を受け取った」と記録している。その後、四一番札所龍光寺では、通りかかった男性が車に乗せてくれたと書いている。移動時間を節約することができるので、この時から「お接待」として乗車を勧められた場合はそれに甘え始めたと書いている。その後も、列車やバスを利用し、あるときには黄色の大型ダンブカーに乗せてもらったこともあった。舗装された道路を車で移動するほうが楽で速いのは言うまでもないが、「新しい道路が闇雲に増設され、そのために山が切り崩され、古道が消えていくことに大きな憤りを感じた」と記している。実際、今回の巡礼について「道中楽しいことなどほとんどなかった」と総括している。

外国人による巡礼ツアー

スタットラーは、前述の二度にわたる四国巡礼の間の一九七〇年三月三十一日〜四月八日に、「四国研修旅行」と銘打ち、六人（二名の外国人と四名の日本人）で一番から二三番までの札所を歩い

て廻っている。参加者の一人は、「我々が会った人々は大変親切だった」とその感想を述べ、別の参加者は、「巡礼は自分が期待したよりはるかに意義深い経験であった。日本人は素晴らしい方法で遍路に敬意を表している。私は遍路になったおかげで、日本人との垣根がなくなった」と感じた。一九七七年七月二日、八月一日、スタットラーは、六名の欧米人のグループと三三番から四〇番までの札所を歩いて廻り、その距離は約三二〇キロにも達した。一人の参加者は、「苦痛のない旅ではなかった。足は水膨れや疲労で動かなくなり、筋肉は痛み、脱水症状などが私たちを悩ませたが、こうした厳しい肉体的試練は、何十倍もの糧となって精神に還元された」と書いている。そのうえ、「いろいろな人々が、外国人遍路に対し、物質的のみならず精神的に支援した」ことが記されている【註3】。そうした贈り物の中には食物や金銭もあった。六年後の一九八三年、スタットラーは、九月二二日から一三日間で一番から二三番までの札所を廻る巡礼ツアーを企画し、京都の同志社大学で学ぶ交換留学生三六名を引率した。その一行を「国際巡礼者」と表現し、彼らが「お接待」という習慣に感銘を受けたとする記事もあった【註4】。

五月二〇日から六月六日にかけて、今度は、二一歳から六四歳までの一六名のアメリカ人グループを四国に案内し、巡礼のルートに沿って一番から二三番までの札所を歩いて廻っている。スタットラーは、親友や巡礼通訳の森川誠夫に宛てた手紙の中で、「かつてないほど遍路の人数が増えている」と書き、さらに、「四国八十八箇所霊場とはいったい何なのか。アメリカの大学生が研究する価値のある課題だろうか」と質問を投げかけている。スタットラー自身の答えは明確で、「巡礼は日本人の信仰の核心に触れる」というものであった。そして、「札所は有益である」とする一方で、「巡礼は、真摯に遂行すること、すなわち歩いて行うことよってのみ理解し得る。なぜならば巡礼の本質は、遍路が肉体的、精神的、宗教的に求められるものにあるからである」と付言している【註5】。

スタットラーは、自身が引率したツアーの結果に満足している。「彼らは、大きな肉体的試練に、仲良く元気に挑戦してくれた。相互に支え合い、私が求めたようにハイキング気分ではなく巡礼の旅として遂行してくれた」と記している。別の手紙では、「私は、引率したグループを誇りに思う。彼らは、水膨れで痛む足で歩きながら、やると決めたことは実行した。それぞれの方法で、日本に關する新たな識見とともに、同じくらい重要な、自分自身に關する新たな識見も得た。それぞれが、達成感と幾分か肉体的、精神的な見返りを得て、やり遂げた」と述べている〔註2〕。

一九八五年五月一八日から六月五日まで、徳島県の二三の札所を徒歩で巡る「海外留学―日本巡礼」というプログラムが企画された。スタットラーは、そのツアーを宣伝するパンフレットに、過去のプログラムに参加した学生のコメントをいくつか盛り込んだ。「「巡礼」は日本を知り、感じて



遍路ツアーに参加したジャパン・ソサエティのメンバー（『徳島新聞』1985年10月13日より）

写真提供：徳島新聞

みたいと心から願う人にはまたとない機会である」、あるいは「日本人の信仰生活の豊かな領域、四国の美しい風景、そして外国人旅行者がめつたに見られない日本の田舎の暮らしに遭遇できると記す。

また、同年一〇月四日から二五日にかけて、スタットラーは、ジャパン・ソサエティのメンバー二名を率いて、一番から二三番までの札所を巡る一三日間のツアーを行った。このプログラムは、仏教についての参加者の知識を深め、日本の伝統を調査研究することを目的に企画された〔註5〕。参加者は、三三歳から七三歳、職業も大学教授、医師、主婦と幅広く、その多くは、事前にハワイで般若心経を朗読する訓練を受けていた。参加者と地元の人々の間には、言語の壁があるにも拘わらず、グループは「お接待」を受け、地元の人たちは誰もが親切であったとスタットラーは語っている。ある参加者は、「天候と体力が心配であるが、「この巡礼をすることにより」私は日本人々の心に触れたい」と書いている〔註6〕。

『日本巡礼』と記録映画の制作

一九八〇年、スタットラーは神戸女学院大学で教鞭を執る傍ら、記録映画「日本巡礼」を撮影している（同名の著書とともに、一九八三年に公開された）。二八分の映画には、空海の人生や伝説の描写に続いて、一番札所靈山寺と付帯施設（遍路の必需品が全て揃えられる）、宿坊、和歌山県から来て遍路に果物を配る人々などが映し出される。遍路は行く先々で「お接待」による支援を受ける可能性があり、接待はグループで計画的に行う場合もあれば、個人が自発的に行うこともあると、スタットラーは述べる。札所は遍路にとって重要であり、道中達成すべき目標であり、かつ札

押し、祈りを捧げる場所でもあると彼はつけ加える。しかしながら、彼は、「札所は巡礼を区切ります、巡礼の全てではない」として、札所と札所の間に体験する人との交流に重要性があると、力説している。

スタットラーの著書『日本巡礼』には、彼が森川誠夫と一緒に廻った巡礼での個人的な出来事、弘法大師に関わる史実や伝説が、取り混ぜて書かれている。一九九〇年代前半まで、四国遍路に関し英語で著された書籍としては本書が唯一のものであった。興味深いことに、スタットラーは自著の中で、キャサリン・メルル・ストッグ（一八九五～一九八三）が出版したアルフレート・ポーナーの博士論文の英訳について述べている。ポーナーとメルルは一九二〇年代に松山で出会い、またスタットラーは一九七一年数か月間日本を訪れていたメルルと松山で偶然出会っている。メルルは一九四一年に完了した英訳をハワイにいたスタットラーに送り、スタットラーはコピーを取った後その原稿を彼女に返送した。数年前、私はこの英訳をハワイ大学のオリヴァー・スタットラー・コレクションの中に発見し、その全原稿を出版した。これによって、多くの読者がポーナーの重要な総合的な学術文献を読むことができるようになり、また、二〇一二年には日本語版『同行二人の遍路―四国八十八ヶ所霊場』（大法輪閣）も出版された【註】。

スタットラーの『日本巡礼』が広範囲に配布されたことにより、世界中で多くの人が四国遍路に関心を抱くようになった。例えば、一九八〇年代に東京の書店で本書を見つけたシカゴ在住のデイヴィッド・ターキントンは、本を読んで四国遍路を体験したいと願い、一九九九年によく実現できた。それ以来、数度にわたって四国遍路を達成し、その道中で多くの欧米人を案内した。また、彼は、四国遍路に関する最も充実した英語の情報サイトを作成し、四国遍路の魅力や価値を世界に発信している。

まとめ

オリヴァー・スタットラーは、欧米人として、初めて四国遍路を完遂した人物でもなければ、書物で紹介した最初の著者でもない。しかし、スタールやポーナーといった先駆者と同様、遍路に魅了され、その価値を評価した。スタットラーは、ハワイ大学などでの講義で四国遍路の魅力を多くの学生に語り、外国人のために四国遍路のツアーを企画し、著書によって多くの欧米人を四国遍路の旅へと誘ってきた。この一〇年、四国遍路に関する情報がインターネット上を賑わせるようになり、活字の世界でも、様々な言語によって、本や記事、学術論文が発表されており、それらが四国遍路を訪れる外国人の増加に繋がっていることは明らかである。

こうした多くの情報や文献を見る限り、百年前に四国遍路を体験したスタールやポーナー、そしてこの三〇〜四〇年前に遍路を実践したスタットラー、彼が案内した外国からのツアー客、そして最近、四国遍路を旅した外国人は、誰もが異口同音にその魅力を語っている。すなわち、遍路は相応な肉体的苦勞を強いるが、「お接待」に触れるうちに、文化的な充足感を得て、精神的に強くなり、結果として、この巡礼に魅了されていく神秘的な体験である。筆者が海外からの遍路を対象に行った調査では、四国遍路は「世界遺産になる価値があるか」という質問に対し、「ある」という回答が多くなされた。

世界遺産になるためには、「顕著で普遍的な価値」を国際的な基準で示すことが不可欠であるが、それは体験をしてみないと難しいかもしれない。しかし、少なくともスタールからスタットラー、そして現在の外国人旅行者まで、遍路を体験した外国人の声を集める筆者の研究からは、活字からインターネットへとメディアが変化しても、百年一日の変わらぬ「普遍性」が浮き彫りになるだろう。

註

- 1 本稿に引用したスタットラーの言葉は、特に記載がない限り、以下の英語文献から引用した。
 - ・ Statler, Oliver. "On Writing About Japan for Foreign Readers: the Pilgrimage to the Eighty-Eight Sacred Places of Shikoku," *The Matsuyama University of Commerce Review*, February, 1975.
 - ・ Statler, Oliver. "Pilgrim's Path in Buddhist Japan," *In Great Religions of the World*, USA: National Geographic Society, 1971.
 - ・ Oliver Statler Collection. University of Hawaii at Manoa
- 2 スタットラーから森川誠夫に宛てた手紙 (1979年)
- 3 Wright, Ashley W. "Experiencing the Shikoku Pilgrimage," *The Asian Wall Street Journal*, October 26, 1977.
- 4 「セッターは日本の心?!」『フォーカス』1983年11月4日、新潮社
- 5 "Americans Start Tour of Temples," *The Japan Times*, October 14, 1985.
- 6 『新潟日報』1985年10月13日
- 7 オリヴァー・スタットラー『同行二人の遍路：四国八十八ヶ所霊場』佐藤久光・米田俊秀（共訳）、大法輪閣、2012年